

大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏 名 鐘 一沁

学 位 博士（日本語文化学）

学 位 記 番 号 甲第153号

学位授与年月日 平成30年3月22日

審 査 研 究 科 外国語研究科

論 文 題 目 日本における漢語受容の諸相

論 文 審 査 委 員 (主査) 大東文化大学教授 寺村 政男
(副査) 大東文化大学教授 藏中 しのぶ
(副査) 大東文化大学特任准教授 青木 淳子
(副査) 群馬県立女子大学教授 安保 博史

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

1. 本論文の要旨およびその特色

本論文は「東アジアの言語接触」の視点より漢語と近世日本語（含む日本古典語）の「言語接触」を考察して行く、その起点として「日本における漢語受容の諸相」をとりあげたものである。「言語接触」という用語はまだ広く学会になじみのある用語ではないが、既に『東アジアにおける言語接触の研究』（2008年・寺村、竹林舎）や『東アジア言語接触の研究』（2016年・沈国威・内田慶市、東西学術研究所研究叢刊51）などにより、次第に定着しつつある。また序章において鐘氏が例を挙げて指摘しているように、例えば「哈叭狗」（犬の狎）を取り上げて説明すれば、Qabaは中世Mongol語では「子犬」を指す。これが女真・満洲語に這入るとKaba-riと変化する。Mongol語音が漢語に入ると漢字表記で「哈叭」となるが、これでは実態がわからないので「犬」を表す「狗」を伴うように変化する。また江戸期滝沢馬琴が著した『南総里見八犬伝』（第七輯巻五）に「番狗長毛、庫脚身絶小、高四五寸、爲哈叭狗、來自京師最貴」とあり「哈叭狗」に右側に「カフ」左側に

「サツパツク」とカタカナを振っている。右側の「カフ」と言うのは「狗」（犬・唐音はgou）であり、左側の「サツパツク」は恐らく誤刻で「哈叭狗」を音読した「ハツパツク」であろうと言う。（実際の発音はハツパツクと音便化して呼ばれていたと考えられるとする）恐らく江戸期の唐人貿易により、もたらされたと考えられる。「來自京師最貴」とあるのは、唐話学の興隆が長崎から京都を経て江戸へとその興隆が進んで行く過程と類似しているとする。

ある言語の語彙がさまざまな過程を経て、他の言語と接触する際には、接触した言語の音韻体系に変化して必要要素が付加され、その国の表記手段を使い表記され定着して行く。もちろん言語語彙は常に消滅と増加を繰り返してゆくので、現代まで継承されている事は却って稀である。本論文が主として扱う、漢語口頭語語彙の日本への流入の研究も、「東アジアの言語接触」の研究の一端を担うものである事を指摘しておく。

2. 論文の審査内容および評価

本論文は、次の章立てから構成されている

序章

第一節 漢語受容について

第二節 本論文の構成

第一章『和名類聚抄』に見られる中古漢語語彙の日本語への流入

第一節 『和名類聚抄』所引漢和辞典について

第二節 『和名類聚抄』と『世説新語』の比較を中心に

第三節 『和名類聚抄』と『太平廣記』の比較を中心に

第二章 日本漢文小説に見られる近世漢語語彙の日本語への流入

第一節 幕末明治期漢文小説における創作作品

1. 『唐話纂要』巻六、『和漢奇談』における傍音について

2. 「孫八救人得福」から見る近世漢語語彙の受容

3. 「徳容行善有報」から見る近世漢語語彙の受容

第二節 幕末明治期漢文小説における翻訳作品

1. 『通俗赤繩奇縁』に見られる近世漢語語彙の受容

2. 『勸懲繡像奇談』に見られる近世漢語語彙の受容

終章

付論 林文月による『源氏物語』の漢訳について

関連資料篇

序章では、中古漢語語彙の伝来について、斎部広成が著した『古語拾遺』の序文を軸にして、『古事記』、『万葉集』や中国の史書によりそれを確証しつつ伝播の流れ、及び日本語への定着過程などを概観している。また平安朝以降の漢語の流入を『和名類聚抄』を中心に説明を加え、平安末期から鎌倉にかけては早期近世漢語語彙の流入を各種『禅語録』を中心に概説を加えている。続いて近世漢語語彙の流入については、長崎の唐人貿易を視座

におき、「唐話」を中心にその成果を略述している。

第一章『和名類聚抄』に見られる中古漢語語彙の日本語への流入

中古漢語語彙が流入する際に現れる語彙の変化や語義の脱落などの現象を再検証する手際は堅実であり、概ね分析結果も妥当である。章は三節に分けている。

第一節 『和名類聚抄』所引漢和字典について、第二節 『和名類聚抄』と『世説新語』の比較を中心に、及び第三節 『和名類聚抄』と『太平廣記』の比較を中心に、の三節で構成されている。主として蔵中進博士の『和名類聚抄』に引く『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『弁色立成』の3書は、「奈良以前に成立した日本人の手になる最初の漢和字典」と言う卓説に依拠して、中古漢語語彙の宝庫である南朝宋の臨川王劉義慶の『世説新語』や宋代太平興國年間編集になる一大叢書『太平廣記』より地道な作業で中古漢語語彙を抽出し、比較検討を加えている。「培塿」（豆牟禮・つむれ・小高い丘）、白水郎（阿萬・あま・海女）等の解釈には優れた見解が見られる。

第二章 日本漢文小説に見られる近世漢語語彙の日本語への流入

「漢文小説に見られる近世漢語語彙の日本語への流入」は、江戸期から明治期に成立した漢文小説に注目し、翻訳作品としては『通俗赤繩奇縁』・『勸懲繡像奇談』の二作品、創作作品としては『唐話纂要』巻六所収の「孫八救人得福」・「徳容行善有報」の二作品を検討の対象として取り上げている。

第一節 幕末明治期漢文小説における創作作品、（1・『唐話纂要』巻六、『和漢奇談』における傍音について。2・『唐通事會所日録』による唐船貿易と言語接触の可能性。3・『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音について。等を含んでいる。個々の語彙への判断は概ね妥当である。

第二節 幕末明治期漢文小説における翻訳作品は『通俗赤繩奇縁』、『勸懲繡像奇談』を取り上げ、検討対象として取り上げられた個々の語彙分析には、「不艦不尪」（フラチ）ように優れた見解が見られる、又個々の分析は概ね妥当と考える。とりわけ、『唐通事會所日録』による唐船貿易と言語接触の可能性、は膨大な資料である『唐通事會所日録』寛文3年（1663）から正徳5年（1715）より唐船の入港記録を分析して、それを元に傍音と南京音、寧波音、杭州音との比較を表に纏めているのは、極めて時間を要する、労作であると言えよう。

終章は、一章・二章の論点を整理した上で、今後は、研究の射程を広げ、鎌倉・室町期の禅語録に関する日中比較を通して、早期白話語彙の日本語への流入実態を探究する旨を記し、全面的な研究の完成をめざしていく展望を開陳している。全時代に亘る「日本語の漢語受容」の実態解明に臨み、研究の新しい鉅脈探索に挑戦されることを期待したい。

付論林文月による『源氏物語』の漢訳について（翻訳論出典論研究会の成果）

『源氏物語』林文月訳は、直接原典に依拠したものではなく、日本語訳を底本として翻訳している。林文月に先行する『源氏物語』中国語訳に、豊子愷の訳があり、豊子愷が主に参考したテキスト類が、現代語訳である谷崎潤一郎『旧訳』、与謝野晶子『新新訳源氏物

語』、佐成謙太郎『対訳源氏物語』、古語原文として金子元臣『定本源氏物語新解』であることがあきらかにされている。これに続く林文月の翻訳の手法を「桐壺」「帚木」「空蟬」の三巻について、注釈部分 77 箇所の出典を検証し、訳出状況を検討した。その結果、林文月が自ら序文で「小学館本古文を底本とした」と述べているにもかかわらず、第一に、小学館本の本文を底本とはしていても、注釈の踏襲は 8 例のみであり、注釈の引用は少ないこと、第二に、注釈部分で「谷崎訳から引用した」と明記しているのは 1 例しかなかったが、内容的には谷崎訳の注釈の引用が 12 例もあったことを指摘した。以上のことから、林文月は注釈に際しては、谷崎訳を多く用いたことをあきらかにした。序文と内容の齟齬を実証的に指摘した点は興味深い。

尚本論文の末尾に付された 100 ページを超える膨大な関連資料は今後の鐘氏の研究の発展に大いに利するものである事は言うまでもない。

3. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。